

国際多元文化専攻・講座

2015 年度後期シラバス



◆科目名：多元比較表象論 b

◇開講せず

◆科目名：異文化接触論演習 b

◇副題：異世界表象の考察—西欧近代の地球的規模での展開の諸相を批判的に検討する—
(2)

◇担当教員：田所光男

◇開講時間：金曜 3 限

◇教室：文総 624

◇目的・ねらい：諸文化の比較研究における基礎的理解力を確保し、修士論文・博士論文を執筆するために応用力を高める。また、この分野で研究を遂行し、成果発表をするための実践力を養成する。今期の授業の中心は、各自の関心に応じて、異世界（異文化・異民族・異人種、等）の表象を批判的に考察することに置かれる。

◇授業内容：

1) 論文批評

〈いい論文〉、〈よくない論文〉、とはどういうものかをまず理解する。特に、論文作法における、a. 絶対にやってはいけないこと、b. 最低限やるべきこと、c. こうするとよくなること、などを、実際の例にあたって考察する。ここで取り上げる論文は、皆さんにとって当面の目標となる『多元文化』、『Autres』等に掲載されている論文である。

2) 異世界の表象の考察

①クロード・レヴィ＝ストロースの『構造人類学』や『人種と歴史』、またエドワード・サイードの『文化と帝国主義』などを参照しつつ、それぞれの関心のある、異世界表象テキストを選び、それについて、批判的に考察する。

②それに先立ち、受講者全員が、異文化考察のためいに必要な最低限の枠組みを共有することを試みる。特に、レヴィ＝ストロースの『人種と歴史』について基本的な理解をもつことを目指す。また、川田順三「人類学の視点と構造分析」（『構造人類学』所収）は、専門の人類学者によるレヴィ＝ストロース研究で、レヴィ＝ストロースの強みと弱みを解明した優れた研究であり、これも参照したい。

③テーマの選択にあたっては、個別に田所と相談する。発表は、45 分から 60 分程度のもの

を準備する。

◇教科書、参考文献等：

教科書は使用しない。授業に参加するために必要な文献は、授業の中で指示する。

◇授業期間中の課題：

- 1) 論文批評担当回までに、論文を読み込み、レジユメを作成する。
- 2) 選択したテーマでの発表担当回までに、文献調査と、その読み込みを行い、詳細なレジユメを作成する。
- 3) 担当しない回では、あらかじめ与えられる基本文献について、読み込みを行い、ディスカッションポイントを考える。

◇成績評価方法・基準：

・以下の3点から総合的に評価する。1) 『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文1本について口頭で批評を行なう（おおよそ20%）。2) 各自の選んだ、異世界表象テキストについて、資料を準備し口頭で発表を行う（おおよそ50%）。3) 授業で行われる発表後の質疑への参加（おおよそ30%）。

・二つの口頭発表を行わない場合は「欠席」とする。

◇履修条件・注意事項

履修条件は特にないが、文化の移動に関わる科目を履修していると理解しやすいであろう。

◇授業についての問い合わせ：

必要に応じていつでも、が原則ですが、できれば電話・メールなどであらかじめ連絡してください。

◇連絡先：

tadokoro@cc.nagoya-u.ac.jp

内線 5311

文総館 7階 707号室

◆科目名：現代文化思想 分析論演習 b

◇副題：ミシェル・フーコーの思想2015-2

◇担当教員：飯野和夫

◇開講時限：木曜 2限

◇教室：文総館522

◇目的・ねらい：人々が現在までに切り開いてきた文化の重要な一部をなす西洋の文化、特に思想を分析して理解を深め、私たちのこれからの文化や思想のあり方について考える。

多元的な文化の一部をなす西洋の文化・思想についての講義であるから、多元文化論の応用力を養成する授業であるが、特に西洋の文化・思想については基礎的理解力か

ら応用力までの養成を目指すものである。具体的には、まず西洋の思想についての基礎知識を与え、併せて、特に西洋の現代思想について理解する応用力の養成も目指す。また、対象とするテキストから、私たちにとっての意味を汲み取っていくという意味での実践力の養成する側面も持つ。

◇履修条件等：

授業で対象とする思想は主としてフランス系だが、授業は日本語で進め、テキストを読む場合も日本語訳、英訳を併用する。したがって、フランス語を既習であることは必須とはしないが、現代の思想、あるいはヨーロッパの思想に興味を持っていることを受講の条件とする。前期開講の「現代文化思想分析論演習a」に続けて受講することが望ましい。

◇授業内容（演習）：

現代フランスの代表的思想家であるミシェル・フーコー（1926-1984）の思想を通じて西洋の思想と社会について考える。

担当者（飯野）の専門は、18世紀から20世紀までのフランスを中心とした西洋思想（哲学や社会思想など）である。担当者は、一方で、18世紀の革新的思想であった「感覚論」（コンディヤックらの、人間の知性は感覚から発達するとした思想）を研究し、同時に、18世紀について論じている現代の思想家（デリダ、フーコーら）も研究している。

この授業では、受講者の興味も勘案して、近年は現代フランスの代表的思想家であるミシェル・フーコーの思想を取り上げている。

2015年度後期の演習bでは、フーコーの中期から後期の「権力論」関係の思想に重点を置いて検討する予定である。

具体的には以下のテキストを扱う。

『監視と処罰 - 監獄の誕生』（1975年）

『ミシェル・フーコー思考集成』所収の論文

『コレージュ・ド・フランス講義』

テキストごとに飯野が内容の簡単な紹介・解説、参考文献の紹介などを行う。適宜実際のテキストも講読する。解説のための資料、講読用テキストともプリントを用意する。授業中には質疑応答の時間を設けるので、受講者は積極的に授業に参加することを求められる。

受講者には、各自が大学院で受講しているさまざまな授業を通して学んでいることと関係させつつ、本授業で学んだことを論じるレポートの提出を求める。

◇成績評価の方法：

1)フーコーのテキストの内容、授業の内容についての理解度、2)授業の内容を発展させる授業中の議論への貢献度、3)レポートの内容、を考慮して総合評価する。おおむね1) 33%, 2) 33%, 3) 33%の割合で評価するが、授業への出席が一定の割合に満たな

い場合は、評価以前に失格とする。

◇教科書・参考書等：

授業内容を参照のこと。

◇注意事項：前期開講の「現代文化思想分析論演習a」に続けて受講することが望ましい。

◆科目名：中南米言語表現論演習 b

◇副題：スペイン語・ポルトガル語言語文化圏対照研究 b

◇開講時限：月曜 4 限（受講者と相談の上、変更あり）

◇教室：北 3 0 5 号室

◇目的・ねらい：

（中南米言語表現論演習 b では、ポルトガル語圏を中心に扱う予定であるが受講者の諸条件を考慮し柔軟に内容を検討する。）

スペイン語とポルトガル語、両言語を広い視野から総合的に対照し知識と理解を深めるための演習である。すなわち本演習において、これら 2 言語自体に対し様々な領域や場において接触する可能性のある受講者が、研究を進めるための方法論に言語学的基礎付けする機会を見出すことを目的としている。なぜならば、東海・中部圏はこれら 2 言語に対する社会的需要が高く、問題に対処するためには、単なる会話能力のみならず、高度な言語学的素養も求められているからである。

本演習では、2 言語への習熟が単位認定の基本的要件となる。しかしながら、近親言語であっても両言語を等しく、いわゆるバイリンガルに扱うのは実際には極めて困難であるので、まずイベリア半島起源の言語に関わる知見を広げてみようといった好奇心を第一に課題に取り組んで欲しい。

◇履修条件等：

少なくともスペイン語またはポルトガル語いずれかの基礎的運用力。いずれか一方を主専攻言語、他を副専攻言語と本演習では呼称する。スペイン語またはポルトガル語話者の留学生諸君の受講も歓迎する。留学生諸君は単なるインフォーマントとしての演習への参加のみならず、日本語および近親言語との比較対照により、母語について新たな発見とより深い認識が得られるであろう。

◇授業内容：

〔概要〕

演習であることから、様々な目的や条件を持った受講者に対応するため、開講時点では特に定めない。また、シラバス編集上、ポルトガル圏とスペイン語圏とに分けて記載するが、両言語圏を並行して扱うことも可能である。

〔授業方法および計画〕（ポルトガル語・ブラジル関係を中心に）

演習であることから、様々な目的や条件を持った受講者に対応するため、開講時点では特に定めない。以下に、過去数年間の主要な内容を示すので参考にしてほしい。

なお、第一週の授業は、授業内容と進め方を受講生と相談した後、残りの時間、以下のテキストを扱い2言語について全般的な比較をおこなう。

Liturgia de las Horas (時祷書) のポルトガル語・ラテン語版との言語的比較対照。

以下、過去数年間の主要な内容を示すので参考にしてほしい。

2014 年度 1) ブラジルの文学作品の日本語訳との比較対象。2) 日系ブラジル人の在日経験を通じたブラジル人と日本人のコミュニケーションギャップについて。

2013 年度 演習a を参照。

2012 年度 演習a を参照。

2011 年度：前期に引き続き、ポルトガル語またはスペイン語の発表を輪番で行いディスカッションを行なった。

2010 年度：ブラジル人留学生をインフォーマントに、ブラジル口語文法の問題点について考察を行った。前置詞や弱勢代名詞、所有形容詞の日常的用法と学校文法との乖離などがテーマとなった。

2009 年度：演習 a のポルトガル語グループの双方向コミュニケーションを発展させ、各受講者が選択したほぼ初見のポルトガル語または日本語の記事を、一段落ずつ出席者が輪番で他の言語に翻訳する演習を行った。

2008 年度：第二言語習得に関する文献講読。日本語・ポルトガル語各母語話者からみた学習上の問題点の考察。

2007 年度：北米におけるブラジル移民に関する文献講読。ブラジル人ポルトガル語母語話者講師から見た日本人向けポルトガル語授業の問題点の考察（実習）。

2006 年度：南米移民についての資料研究、発表。留学生を交えた討論等。

2006 年度：副専攻言語（ポルトガル語）の母語話者 TA との表現演習。時事問題についての討論等。

2006 年度：副専攻言語（ポルトガル語）の母語話者 TA との表現演習。時事問題についての討論等。

2005 年度：ポルトガル語史・語学に関するポルトガル語文献の講読と発表、討論。

複数年度にわたり適宜対象としてきた演習内容：日本国内制作のスペイン語・ポルトガル語メディア。日本国内のスペイン語話者、ポルトガル語話者の言語社会的状況。

◇成績評価の方法：

スペイン語とポルトガル語2言語への習熟を前提に、次の3要素を中心に総合的に判断する。

- 1) 各自のテーマについての発表（学会・研究会等の発表も含む）。40%
- 2) 講読文献（スペイン語・ポルトガル語両言語）の精読による発表。40%
- 3) 副専攻言語（スペイン語またはポルトガル語）による作文演習（ネイティブチェック

を受けること)。20%

◇教科書、参考書等：

Ana Cristina Braga Martes, Soraya Fleishcer, *Fronteiras Cruzadas Etnicidade, Genero e Redes soicais*, Sao Paulo, 2003.

Machado de Assis, *Dom Casumirro*, 1899.

Milton M. Azevedo, *Portuguese A linguistic Introduction*, Cambridge, 2005.

Paul Teyssier, *Histoire de la langue portugaise (Que sais-je?)*, Paris, 1980. (ポルトガル語版は2006年度前期の教科書である。)

Marie-Thérèse Vasseur, *Aquisição da L2: compreender como se aprende para compreender*

o desenvolvimento da competência em interagir em L2, São Paulo, 2000.

日向ノエミヤ, *ことばを越えて —ブラジル人と日本人のカルチャーショックの一面 Alem das Palavras [日葡両語]*, 世論時報社(国際文化交流事業財団), 1995.

新聞・雑誌 インターナショナルプレスポルトガル語版、Veja など

◇注意事項：

スペイン語とポルトガル語を扱うことを大前提としている演習である。演習 a と b を履修することが望ましい。演習 b からの履修も可。

この授業は、2010年度から多元文化論講座で開講している。

◆科目名：文化記号論 b

◇副題：レトリック入門

◇担当教員：古田香織

◇開講時限：火曜 3 限

◇教室：文総 522

◇目的とねらい：

まず、レトリック(修辞学)について講義と文献読解(授業中に指示)により基本的概念を学習することによって、レトリックについての基礎的理解力を養成します。次に、そのレトリックの基本的な概念が、実際の会話や文学作品などやその他の様々な文化現象で用いられていることを観察し、それをレトリックの視点に基づいて分析する応用力を養っていきます。前期と同様、文化現象を多角的に捉えることのできる視野・応用力・思考の柔軟性・分析力を身につけてもらうことがこの授業の目標です。

◇履修条件等：

- 1)記号論の基本的理論、概念、方法論を前提としたレトリック論を展開している
くので、前期開講の「文化記号論 a」を受講しておくことが望ましい。
- 2)前期に「文化記号論 a」を受講していない場合は、「文化記号論 b」の受講

にあたり、池上嘉彦著『記号論への招待』（岩波新書）を必ず読んでから受講してください。

◇授業内容：

記号論の考え方に触ればすぐに、それがレトリックと深い関係があることに気がつくと思います。この講義では、レトリックの歴史や先人の考え方を学びつつ、記号論との接点を探り、そして今、私たちの周りにある、様々なレベルでのレトリック現象に目を向け、それらがどのような修辞によって私たちに何を表現しようとしているのかということを考えていきます。

授業では特定のテキストを用いず、基本的な用語や考え方についての、様々な研究者の理論を引用しまとめたプリントを使用します。

授業は以下のように進めます。

まず、初回の授業では、この授業についてのオリエンテーションを行います。授業の進め方、評価の仕方、プリントの配布、参考文献等の紹介を行います。次に、『記号論への招待』の中で取り上げられている様々な概念の中で、特にレトリックと関連する考え方を再確認します。

講義形式で、『レトリック』の代表的な研究について通時的に（時間の流れにそって）概観します。また、第2回目でだいたいこの授業を受講するメンバーが決まるので、ここで、後半の演習（発表）での担当者とコメンテーターを割り振り、順序を決めます。

講義形式で、『レトリック』の主な用語および用法を学びます。その際紹介される実例をもとに、発言を求めることもあります。

第4回目以降は、『レトリック』という学問をさらに理解するために、レトリックについての論文、あるいはレトリックを用いた論文等を発表形式で読んでいきます。毎回、受講者はあらかじめ指定されたレトリックに関する論文を読み、その内容を簡単にまとめておくことが課題となります。授業での発表は、あらかじめ割り振られた担当者がハンドアウトを用いて行い、担当者に前もって指名されたコメンテーターがさらに補足をし、あとは受講生が自由に質問をしたり、問題点を指摘したりしながらディスカッションを行い、さらにレトリックについての見識を深めつつ、その応用の可能性を学びます。

最終回には、それぞれの発表をもう一度振り返りながら、論点や問題点について再度ディスカッションを行います。最後に、各々が発表した論文について、授業でのディスカッションをふまえつつまとめたものをレポートとして提出してもらいます。

◇成績評価の方法：

評価は、課題（発表・レポート）および出席点（出欠、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度）に基づいて行います。

- 1) 発表：論文の理解度、読解の正確さ、ハンドアウトや説明がわかりやすく構成されていたか→40%（100点満点で40点）
- 2) 出席点：やむを得ない場合を除き授業に出席し、論文をきちんと予習して、積極的に発

言をし、ディスカッションにも参加したか→30% (100点満点で30点)

3) レポート：論文をきちんと理解し、ディスカッションで得られたポイントも整理できている、わかりやすく書けていたか→30% (100点満点で30点)

4) 以上を基準として評価し、60% (100点満点で60点) 以上を合格とします。

◇教科書：

初回以降、適宜プリントを配付します。

◇参考書等：

・ 野内良三『レトリックと認識』日本放送出版協会

瀬戸賢一『認識のレトリック』海鳴社

瀬戸賢一『空間のレトリック』海鳴社

芝原宏治『錯誤のレトリック』海鳴社

・ 山梨正明『比喩と理解』認知科学選書17 東京大学出版会

その他、必要に応じて授業中に指示します。

◇注意事項：

受講を検討しており、初回の授業に参加できない場合は、前もって個別に相談に来てください。

◇連絡先

j45914a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

文系総合館5階506号室

オフィスアワー：水曜日3限

※前もってメールでアポイントを取ってください。

◆科目名：国際文化学概論 b

◇副題：Ethics in Major Religious Traditions

◇担当教員：Simon Potter

◇開講時限：水曜5限

◇教室：文総522

◇Objectives:

To do some projects connected to the subject of ethics, especially in regard to major religions in the world; to gain some experience in writing short essays and a term paper in English; and to use the English language in the context of an academic seminar.

◇Contents:

The class meetings will be devoted to discussing the sections in the textbook which deal with ethics in regard to Hinduism (under the rubric of rāja yoga), Buddhism, Judaism, Christianity, Islam, Confucianism, and Taoism. Each week, students will be expected to write a short essay of approximately 500 words related to the assigned section, and these essays might be integrated into the

class discussions. Besides the weekly assignments, students will be required to do a longer, individual research-based project that will be due in the penultimate week of term; this will be a “term paper” of 2000 to 3000 words of text, supplemented by notes and references, and each student’s theme will need to be approved after consultation with the professor early in the term.

◇Teaching Methods:

The professor will handle the class meetings in a seminar format emphasizing discussion and/or explanation.

◇Textbook:

An Interview with Prānavichāra about the Subject of Ethics (newest version), which will be made available by the professor from the first class meeting.

◇Reference Books:

At least one dictionary and a standard grammar book for working with the English language are recommended.

◇Grading:

Sixty percent of the course grade will be based on the results of the weekly activities, mainly the written essays (but participation might be taken into account), and forty percent will be based on the term paper. Please note that all written projects will need to be submitted on time and that late ones will not be accepted for grading.

◇Notes:

In the event of too many students wanting to take the course, up to fifteen will be selected according to a written project that will be given in the first meeting. To maintain academic integrity, G-30 postgraduates will be expected to perform at a higher level than the others and, hence, will be graded more strictly. For the same reason, any instance of discovered plagiarism automatically results in the guilty person receiving a failing grade for the entire course.

◆科目名：先端文化思想論 b

◇副題：労働力均質化時代の性と文化 — 性の解放と資本主義の精神

◇担当教員：越智和弘

◇開講時限：火曜 4 時限

◇教室：文総館 609

◇目的・ねらい

前期の授業「先端文化思想論 a」においては、長らく世界に向けて普遍性を標榜してきた西欧近代が、じつは他の文化から見るときわめて希有な性格をその起源にもっており、世界でも類をみないその特殊な精神を糧に、資本主義が発展してきたことを理解しました。

後期の授業では、そうした資本主義の過去 5 世紀におよぶ発展史を踏まえ、20

世紀の後半期がいかに位置づけられるのかを、次の点から明らかにすることを目標とします。

- (1) 資本主義の核心をなす天職倫理が、性を極度に恐れ、性の体現者とされる女性を徹底して周縁化することで成り立ってきた事実を学びます。
- (2) 地球上のどの文化にもみられない西欧に独特な伝統に気づくうえで、1960年代以降の女性アートが、またとない道先案内役を果たした意味を理解します。
- (3) 20世紀後半期に勃発した性と女性をめぐる解放運動が、資本主義が最も発達し円滑に機能している地域において起きた事実を知り、その意味を考えます。
- (4) 性と女性の解放運動が、当時みなされたように権力者による抑圧からの解放を目指す主体的行動ではなく、じつは資本主義が新たな段階に至るためにいわば必然的にプログラムされたものであった可能性に気づきます。
- (5) 20世紀前半期までは排除の対象であった女性と非西欧人を、労働市場に動員するためには、両者を西欧人男性の職業規範に合わせ「均質化」することが不可欠であったことを理解します。
- (6) 均質化によりタブーの枠を取りはらわれた人間の身体が、仮借なき商品化の荒波に曝されることで、かつてあった性の力が無化され、脱肉体化の一途をたどる時代にわれわれが生きている事実とその将来について考えをめぐらせます。

◇授業内容（講義）

- (1) 授業は、内容を分かりやすく整理し、図式的に理解するために、Keynoteによるスライドの提示により進められ、その内容は、毎授業終了後にプリントとして配られます。
- (2) 授業で取りあげるテーマは概ね以下のようになります。
 - ・ 考察の視座、そして世界の文化地図
 - ・ キャロリー・シュニーマンの『胎内からの巻物』
 - ・ 均質化を達成するための条件
 - ・ 性の解放を誘因した三つの要素
 - ・ 女性排除の構造と普遍性
 - ・ 性を思想化する意識の台頭
 - ・ 超自我の20世紀的変容、もしくは父に代わる装置の台頭
 - ・ 性の解放による脱肉体化社会の到来
- (3) 授業においては、授業の中で取り上げる思想家の基礎的文献の一部を収めた英文の講読テキストを冊子として用意してあります。それは、受講者の人数に応じ調整しつつ、講義の間に挟んで発表してもらい、ディスカッションをするための材料として用いられます。
- (4) 授業は、基本的に日本語で行いますが、受講生からの要望があれば、英語もしくはドイツ語による説明を加えることを厭うものではありません。

〔授業期間中の課題・宿題等〕

講義ノート、講義ごとに配付するプリントを用い復習をしてもらいます。初回の授業にお

いて、

(1) 各回の授業内容・目標を説明し、

(2) 授業に関連する思想家の基本的文献から抜粋した講読テキストの内容を紹介し、受講者にはその中から担当できるものを一つ選んでもらい、

(3) 授業の最後には、各自の関心事や研究テーマと授業で学んだ内容を関連づけたレポートを提出してもらいます。

◇教科書・参考文献等

使用教材：製本済み冊子（生協にて実費販売）

参考書：越智和弘著『女性を消去する文化』鳥影社

成績評価方法・基準

◇評価は、受講者に担当してもらうテキストの発表を 40%、授業最終時に提出してもらうレポートを 40%。さらに、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を 20%程度として加味し、総合的に評価します。

◇履修要件等

(1) 履修要件は特にありませんが、今日世界が抱えるさまざまな問題の由来はどこにあるのか、それを読み解くうえで、言語文化や芸術に何ができるのか、といったことに興味を抱いていると、授業で提供される情報や具体例が理解しやすいでしょう。

(2) 「先端文化思想論 a」履修していることが望まれます。

◇授業についての問い合わせ

メールでの質問などは常に受けつけます。オフィスアワーは、火曜日 5 限です。

◇連絡先：

ochi@lang.nagoya-u.ac.jp

文系総合館 6 階 618 号室

◆科目名：前衛芸術概論 b

◇副題：近現代音楽における資本主義的属性 (2)

◇担当教員：藤井たぎる

◇開講時限：火曜 6 限

◇教室：国際言語文化研究科棟 4F スタジオ

◇目的・ねらい：

近現代音楽の構造と資本制のメカニズムとがいかに相互に関連しあっているかを具体的に検証する。その際、近現代音楽文化史を読み解くための応用力を身につける。

◇履修条件等：原則として「前衛芸術概論 a」を受講していることが望ましい。ただし、近現代音楽史について基礎的な知識を有している場合は、その限りではない。

◇授業内容（講義）：

〔概要〕

ジャック・アタリの『ノイズ』では、ヨーロッパ中世以降のそれぞれの時代に特徴的な音（ノイズ）に着目し、それらの音が社会のシステムの中に回収され、楽音（サウンド）として再編成されていくプロセスを、時代を追って読み解くことで、西洋音楽史からヘゲモニーの変遷を鮮やかに浮き彫りにしている。18、19世紀の調的和声や20世紀前半の12音技法にしても、第2次世界大戦後のカールハイント・シュトックハウゼン、ピエール・ブーレーズ、ルイージ・ノーノら前衛音楽の作曲家たちによるトータル・セリエリズムにしても、音楽のシステムは政治形態や美学思想ばかりでなく、経済体系や心的装置のメカニズムと密接に関わっていると考えられる。マルクスの価値形態論において、価値形態の最終形態として〈貨幣形態〉が提示されるに至るまでの堂々巡りにおける自己言及ループが、なにより価値の代理-表象として機能している貨幣なるものの不思議さを物語っている。つまり、貨幣が貨幣として循環するためには、貨幣が価値のエージェントでなければならないが、また貨幣が価値のエージェントであるためには、貨幣はつねにすでに貨幣として循環しているのでなければならない。貨幣が貨幣として循環することと、貨幣が価値のエージェントであることは、いずれも互いに他方が成立するための前提条件になっている。価値は貨幣という形態をとおしてそのアイデンティティを確立する一方で、貨幣という形態はその前提となる価値をその循環のプロセスのうちにもたらす。調的和声のシステムに関して、それはつぎのように言い換えることができるとしたらどうだろう。すなわち、主調が主調として循環するためには、主調が調性のエージェントでなければならないが、また主調が調性のエージェントであるためには、主調はつねにすでに主調として循環しているのでなければならない。主調が主調として循環することと、主調が調性のエージェントであることは、いずれも互いに他方が成立するための前提条件になっている。調性は主調という形態をとおしてそのアイデンティティを確立する一方で、主調という形態はその前提となる調性をその循環のプロセスのうちにもたらす。

〔授業方法および計画〕

上述のような資本制と近現代音楽システムの関係性を、具体的に以下の観点から考察する。

- *愛のオペラ、オペラの愛：モーツァルトのダ・ポンテ三部作
- *死のオペラ、オペラの死：ベルクの『ルル』
- *引用・コラージュ・脱構築：芸術の再生か、それとも芸術の死か
- *音楽の未来、未来の音楽：資本主義の延命か、それとも死か

なお、上述の各項目での予習内容については講義の中で指示する。

◇成績評価の方法：

成績の評価は以下の基準にしたがって行う。出席（50%）、プレゼン形式による課題レポート（50%）。

◇教科書：スラヴォイ・ジジェク『オペラは二度死ぬ』ほか。

◇参考書：授業中に必要に応じて指示する。

◇注意事項：欠席する場合は、メール等で連絡すること。

◆科目名：現代民主主義特論 b

◇副題：現代の政治社会における民主主義とその理論的・哲学的諸前提

◇担当教員：布施哲

◇開講時限：月曜 5 限

◇教室：文総

◇目的・ねらい：

人文社会科学の基礎的理解力を身につけることで、国内外の政治的、社会的動向を考察するために必要な知性と応用力を培う。

◇履修条件等：

日本語の非常に高度な運用能力はむろんのこと、英文で書かれた専門書や評論を読み込むだけの英語力は必須となる。また、最小限のフランス語文献読解能力があれば尚可(採り上げる主題によっては不要)。政治学や哲学の基本的諸概念に関する予備知識が受講当初に不十分であることはなんら問題とはならない。ただし、わからなければその都度、自ら調べて理解しようとする積極性のない学生はこの講義にはまったく向かない。さらに、授業で指定された参考文献は、可能な限り迅速に一通り目を通しておくことが望ましい。

◇授業内容：

〔概要〕

ここ数百年のうちに人類が築いてきた物質文明の限界が露呈してきた現代においては、政治、社会、経済、国家、市民、民族、アイデンティティ等々ついて語るうえで、私たちが普段は当然視している様々なものの考え方に対する批判的、原理的な分析や解明が、ますます必要になってきている。そうした問題意識ならびに状況を背景とする本授業は、したがって、必然的に哲学的な議論の比重が高くなるが、それは現実離れした誇大妄想や内省的な「自分探し」の類とは真逆の、アクチュアリティに富んだ、しなやかでありながらも強靱な知性を涵養するためのものである。

〔授業方法および計画〕

前期・後期とも、数回の講義を経て学生諸氏の基本的な理解度やパフォーマンスを見極めたうえで、読解を進めてゆく主たるテキストをあらためて指定する。テキスト指定後は、学生による発表内容を叩き台としつつ、テキスト当該個所の主要なサブテーマを明確化すると同時に、それが今日的な問題といかに関わり、あるいはいかに関わらないかについての議論を進めてゆく。

◇成績評価の方法：

出席：30%、授業への積極的貢献：40%、発表：30%（ただし、学生によって学期末にレポートを課す場合がある。）

◇教科書：

必要なその都度、指定する。

◇参考書：

必要なその都度、指定する。

◇注意事項：

特になし。

◆科目名：現代先端文化分析演習 b

◇副題：身体・イメージ・メディアーハンス・ベルティンク『イメージ人類学』の読解と応用

◇担当教員：山口庸子

◇開講時間：木曜 5 限

◇教室：文総 522

◇目的・ねらい：

「イメージ人類学」を提唱する美術史家・メディア研究者ハンス・ベルティンクの著書『イメージ人類学』を読み、身体とイメージ、メディアの関係を論じる際の基礎的理解力を身に付ける。次いで、ダンスないしは映画の映像の一部を、授業の中で実際に分析し小レポートにまとめることで、応用力と実践力の涵養に努める。

◇履修条件等：ベルティンクのテキストは下記の邦訳を用い、必要に応じて原典を参照する。教科書は各自で入手すること。履修条件は特に指定しないが、身体史・身体文化・パフォーマンス・メディア論等に何らかの関心を持っていることが望ましい。

◇授業内容：

導入の後、ベルティンクの用語や思考法を確認しながら『イメージ人類学』および関連文献を講読する。その後、特定の映画ないしダンス・ビデオの一部を、ベルティンクの方法を使って分析し、小レポートを提出してもらう予定である。ただし、参加者の関心や前提となる知識を考慮して内容の修正を行うことがある。詳細な授業予定表・文献表は、最初の時間に配布する。

◇成績評価の方法：出席：20%、授業への積極的貢献：20% 文献報告:30% 小レポート：30%

学期末の小レポートの提出がなかった場合には、「欠席」とする。

◇教科書：

ハンス・ベルティンク『イメージ人類学』仲間裕子訳 平凡社 2014年

◇参考書：

必要な文献は、授業の中で適宜指示する。

◇注意事項：

なし

◇オフィス・アワー：

必要に応じて随時。メールで予約すること。

◆科目名：アメリカ文学・文化論 Ib

◇副題：アメリカ文学史概観 (2)

◇担当教員：長畑明利

◇開講時限：月曜 6 限

◇教室：文総館 609

◇目的・ねらい：

この授業の目的・ねらいは主として次の3点である。1. 20世紀なかばから現代にいたるアメリカ文学史についての理解を深める。また、種々の文学史上の重要項目に関連するテキストの実際を知る。2. その過程で、自分なりの(学術的な)問いを見いだす。また、自分が得た問いをより大きな知的文脈に置いて吟味する。3. 文学・文化の研究に必要なリサーチの方法について学ぶ。また、1次資料、学術論文の読解に資する高度な英文読解力を涵養し、学術論文執筆に必要となるライティングのスキルを身につける。(特に、作品を正確に読む力をつけることを重視する。)

◇履修条件等：

基基礎的な英語読解力を有すること、学習に対する意欲、積極性を有することを履修の条件とする。前期同時限に開講される「国際多元文化特殊講義 Ia」と連続して受講することが望ましい。関連科目として、「英語表現演習 IIIb」、「英語表現技術演習 b」、「英語学術論文演習 b」を挙げておくが、英米文学・文化に関する他の授業も受講するとよい。

◇授業内容：

前後期を通じ、19世紀後半から現代にいたるアメリカ文学の作品のいくつかを年代順に読み、文学史を概観する。a(前期)、b(後期)ともに、Nina Baym, et al., ed., *The Norton Anthology of American Literature, Vol. 2: 1865 to the Present* (Shorter Eighth Edition) を用いる。

(目次 → http://media.wwnorton.com/cms/contents/NAAL8S_TOC.pdf)

b(後期)においては、教科書に従い、20世紀半ばから後半の文学作品を扱う。作品は網羅的に扱うのではなく、適宜取捨選択する。(取りあげる作品については、授業HPに示す。)

毎週の授業は報告形式で行う。授業用のメーリングリストを作成するので、授業前日の午後5時までに、受講者は自分が重要と考える箇所の和訳とコメントを投稿する。受講者はそれらを読んだ上で授業に望む。授業では、担当者が他の受講者の和訳・コメントについて論評を行った上で、担当作品の任意の箇所の英文和訳を行い、また作品について論評する。

各回の課題については、別途授業用ウェブページに載せる。上記文学史に収録された作品を取捨選択する予定だが、授業で扱わない作品も各自で読むことが求められる。

月曜 5 限等にビデオ上映会を開催し、学期中に重要な映画作品を見てもらうことも検討する。

学期末に、自分で選んだ作品 1 点について論じる口頭発表をしてもらう。トピックは各受講生と教員とで相談して決める。また、期末レポート 1 点（英文）を課す。

◇成績評価の方法：

基礎的な英語力を有することを単位取得の条件とする。そのうえで、授業点 50%、期末レポート 50%。欠席 3 回で単位放棄とみなす。遅刻 2 回で欠席 1 回分とする。

◇教科書：

・ Nina Baym, et al., ed., *The Norton Anthology of American Literature, Vol. 2: 1865 to the Present* (Shorter Eighth Edition) (Norton, 2012) [ISBN: 978-0393918878] 各自購入のこと。

◇参考書：

- ・ Greil Marcus and Werner Sollors, ed., *A New Literary History of America*
- ・ Emory Elliot, et al., ed. *Columbia Literary History of the United States*
- ・ 渡辺利雄『講義アメリカ文学史』（全 3 巻＋補遺）
- ・ 平石貴樹『アメリカ文学史』
- ・ 亀井俊介『アメリカ文学史』（全 3 巻）
- ・ その他、授業 HP もしくは ML にて紹介する。

◇注意事項：

- ・ 授業関連の連絡は、授業 HP もしくは ML にて行う。
- ・ 本授業はアメリカ言語文化講座開講の「アメリカ文学・文化 Ia」との合併授業である。
- ・ 次年度は Nina Baym, et al., ed., *The Norton Anthology of American Literature, Vol. 1: Beginnings to 1865* (Shorter Eighth Edition) をテキストとして用いる計画である。
- ・ 授業 HP は次の通り：

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/lectures15/amcul15/amcul15b.html>。

◆科目名：アメリカ文学・文化論 IIb

◇担当教員：長畑明利

◇開講時限：今年度は開講しない。

◆科目名：言語文化情報論 b

◇担当教員：尾関修治

◇開講時限：後期金曜 3 限

◇教室：北棟 309

◇目的・ねらい：

英語教育をはじめとした教育現場でコンピュータとネットワーク(ICT)をいかに教育支援に活用するかを学ぶ。単に利用のテクニックや開発手法だけでなく、ICTの活用が教育にどのような意味を持つのかについても議論する。今期は特に自主学習を支援するドリル問題型教材の開発と学習支援サイトの運用を中心に学ぶ。

◇履修条件等：

コンピュータとインターネット利用に関して一般的な技能が必要。HTML その他の web 技術についても既習であることが望ましい。

◇授業内容：

〔概要〕

英語教育はいくつかの特徴から ICT の利用が活発な領域である：学習者の年齢等の幅が広い；シラバスが確立されている；音声教材が必須である；その他。英語教育での e ラーニング開発と活用を学ぶことで他の領域での教育支援にも応用可能な技術と知見を得ることができる。

以下の内容をそれぞれ 1 回ないし数回の授業で取り上げ演習する：

- ・ e ラーニングとは何か。語学 e ラーニングに求められるもの。
- ・ e ラーニング教材作成の実際
- ・ 学習支援サイトの設置と運用

以下のサービスとツールを取り上げ、解説と実習を行なう：HTML と CSS, JavaScript, Hot Potatoes と XoopsHP 等の教材作成ツール、音声のデジタルイズとポッドキャスト、動画のエンコーディングと共有、XOOPS や Moodle 等の LMS。

予定されるレポート課題の例：自習型 e ラーニングコースの制作と Moodle での運用

〔授業方法および計画〕

- 1) ICT 利用教育とは何か。英語利用教育に求められるもの。
- 2) 学習支援サイトの設置と運用
- 3) 英語 e ラーニング教材作成実習
- 4) LMS の導入と運用
- 5) 課題発表・講評とまとめ

◇成績評価の方法：

開発や議論を重ねることで自分のアイデアをどのように発展させていったかというプロセスを重視して評価する。したがって、講義期間を通して授業サイト上の Wiki 等に記述したメモや課題が直接的な評価の対象となる。

◇教科書・参考書等：

HTML の文法書等を必要に応じて使用する。他に関連論文を配布する。

◇注意事項：

特になし。

◆科目名：第二言語習得演習 b

◇担当教員：村尾玲美

◇開講時限：今年度は開講しない。

◆科目名：北米文化研究 b

◇担当教員：Christopher J. Armstrong (非常勤講師・中京大学)

◇開講時限：金曜 2 限

◇教室：文総館 623

◇授業内容：後日連絡。

◆科目名：社会文化論から見た言語学習 b

◇担当教員：Jeremy Cross

◇開講時限：月曜 5 限

◇教室：文総館 623

◇講義目的：

To explore L2 pedagogy and learning from the perspective of sociocultural theory.

◇履修条件等：

You need to be at least an advanced learner of English to fully participate and benefit from this class.

◇授業内容：

We will focus on sociocultural theory and practice from a pedagogical perspective. Underlying concepts such as the ZPD, Activity Theory, and dynamic assessment will be covered, as well as empirical research which examines the application of such notions in relation to L2 reading, writing, listening and speaking.

◇成績評価の方法：

Attendance, participation, preparedness for lessons and presentations.

◇教科書・参考文献等：

Swain, M., Kinnear, P. & Steinman, L. (2010). Sociocultural Theory in Second Language Education: An Introduction Through Narratives. NY: Multilingual Matters.

◇注意事項：

Students are expected to complete the assigned reading before each lesson. In class, students are expected to engage in small-group discussions based on what they have read. A different group member will prepare discussion questions, lead the discussion each week, and present discussion outcomes to the rest of the class. This course is a precursor to Sociocultural Perspectives on Language

Learning II.

◆科目名：現代中国語表現論演習 b

◇副題：日中対照研究の可能性

◇担当教員：勝川裕子

◇開講時限：火曜 4 限

◇教室：文総 624

◇目的・ねらい：

中国語学に関する基礎的理解を深めると同時に、問題設定やアプローチの仕方等、文法研究の方法論を身につけ、それを自身の研究で実践する力を養成する。

本演習では、研究発表を通して自身の研究内容を論理的且つ効果的に伝える方法を習得すると同時に、学術討論及び質疑応答の経験を積み重ねることによりディベート力を培っていく。

◇履修条件等：

中国語で書かれた論文を題材として扱うため、中国語がある程度理解できることが望ましい。

◇授業内容：

〔概要〕

言語の表現形式はその言語を使用する民族集団の事象・現象・心象に対する認識を反映している。本演習では、中国語母語話者が、空間・時間・数量・否定・可能などに関わる事象をどのように認識し、それがどのように言語化されているかについて、統語的、意味的側面から探っていく。同時に、日本語表現との比較対照を通じて、それぞれの言語内部に見られる種々の現象を有機的に関連付けていきたい。また、中国語教育、日本語教育において、日中対照研究の成果をいかに応用していくかについても併せて考えていく。

〔授業方法および計画〕

授業前半では中国語文法に関する個別の言語事象を取り上げ、関連する論文を輪読しながら討論する。授業後半では毎回、受講者による研究発表（30分）とそれに対する質疑応答（15分）を行う。発表担当者には、授業で取り上げたテーマ、もしくは中国語・日本語における任意の言語事象を取り上げ、問題点の整理と独自の分析・考察を発表してもらう。原書講読の際には、必ず予習をしてくる。また、発表担当者は発表の1週間前までにレジюмеを作成し、教員の添削、修正を経た上で発表に臨むこと。

◇成績評価の方法：

以下の3点に基づき、総合的に評価する。

- ① 授業（ディスカッション等）への参加度（30%）
- ② 研究発表（30%）

③ 学期末のレポート（40%）

※②③に関して、特に言語専門の受講者は、自身が関心を持つ任意の言語事象を取り上げ、関連付けて分析を深めていくことが望ましい。

◇教科書：

プリントを配布する。その他、取り上げるテーマに関連する個別の参考文献等についても、授業時に随時紹介していく。

◇参考文献：

中国語文法の体系的把握や文法研究の方法論理解に役立つものとして、以下の文献を通読しておくことが望ましい。

- ① 朱徳熙《語法講義》，商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）
- ② 呂叔湘等著・馬慶株編，《語法研究入門》商務印書館
- ③ 陸儉明《現代漢語語法研究教程》，北京大学出版社

◇注意事項：

本演習は受講者の人数、関心等に応じて内容を調整し、演習形式で進めるため、発表・ディスカッションを通じた積極的な参加を期待する。尚、専門分野を問わず、言語に対する強い関心や意欲のある学生の履修は大いに歓迎する。

◆科目名：東アジア言語論演習 B

◇副題：ソヴィエト言語類型論序説

◇担当教員：柳沢民雄

◇開講時限：水曜 2 限

◇教室：文総館 522

◇目的・ねらい：

言語研究は個別の具体的な言語を研究することが主でなければならない。それも音韻だけとかシンタクスだけしか研究しないということであってはならない。ある特定の言語を研究するのであるならば、その言語の音声、音韻から形態論、シンタックス、意味論までの全ての領域にわたって専門の知識を蓄えるべきであろう。またそういった個別言語の研究と同時に、世界の様々な諸言語に見られる音声、音韻、文法カテゴリー、シンタクスなどの一般的な理論研究も必要であろう。人間が使う自然言語には言語の様々なレベルで類似の特徴が多く見られる。そういった人間言語の特徴とはなにかというより広い視野から、常に自分の専門とする個別言語の研究に向かうべきであろう。本講義は後者のより広い視野から言語のある文法的側面を検討しようというものである。

◇履修条件等：

ロシア語の文献を読めることが必要。

◇講義内容：

〔概要〕

今年度後期は 1930-1940 年代のソヴィエトで行われた言語類型論について講義し、この時代のソヴィエト言語学の一端を知ることを目指す。N. Ya. マールの死後、マールの弟子のメッシュャニーノフを中心とする「マール名称言語と思惟研究所」に集まった研究者、特に、メッシュャニーノフ、カツネリソン、デスニッカヤ、ボカリョーフ、等を中心に、彼らの研究を取り上げ、後にクリモフによって発展したソヴィエト言語類型論の歴史を跡づける。メッシュャニーノフはソ連邦内の様々な言語の文構造を類型的、共時論的に検討しながら、それらの文構造の類型を「段階的な」発達と捉えている。その結果、主格構造の前段階として能格言語構造を含めた様々な言語類型を探求している。カツネリソンは印欧語研究を通じて、主格構文の中により古い「能格的過去」を仮定している。デスニッカヤは印欧語の文構造に能格言語類型とは異なる言語類型を仮定した。これらの研究に、ボカリョーフのコーカサス諸語の資料が能格言語理解に大きく貢献した。このような時代のソヴィエト言語類型論の概略をこれらの研究者の資料を用いて跡づけることを目指す。

〔授業方法および計画〕

1. 30-40 年代のソヴィエト言語学概説。
2. デスニッカヤ『ソヴィエト言語学の歴史からの一章』講読。
3. デスニッカヤ『ソヴィエト言語学の歴史からの一章』講読。
4. デスニッカヤ『ソヴィエト言語学の歴史からの一章』講読。
5. メッシュャニーノフ『一般言語学：語と文における段階性の問題に寄せて』の講読。
6. メッシュャニーノフ『一般言語学：語と文における段階性の問題に寄せて』の講読。
7. カツネリソン『主格文の起源に寄せて』の概要講義。
8. ボカリョーフ『アヴァール語統語論』の概要講義。
9. 印欧語の文の類型研究の歴史（カツネリソンからガムクレリゼ・イヴァーノフまで）。
10. 非印欧語の文の類型論的研究（コーカサス諸語研究とメッシュャニーノフ）。
11. ガムクレリゼ以後の印欧語の類型論研究（ステパーノフ）。
12. 戦後のソヴィエト類型学研究（「異類形言語の能格文構造」会議）。
13. クリモフの言語類型論研究。
14. まとめ。

◇成績評価の方法：

履修取り下げ制度を採用する。

評価は口頭発表とレポートを各 50 パーセントとして評価する。

◇教科書、参考書等：

参考文献：

А. А. Бокарев. Синтаксис аварского языка. 1949.

А. В. Десницкая. Сравнительное языкознание и история языков. 1984.

С. Д. Кацнельсон. Историко-грамматические исследования. 2010.

И. И. Мещанинов. Общее языкознание. К проблеме стадильности в развитии слова и предложения. 1940.

Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов. Индоевропейский язык и индоевропейцы. 1984.

Ю. С. Степанов. Индоевропейское предложение. 1989.

◇注意事項：

特になし。

連絡先 k46413a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

文系総合館 5 階 503 号室

◆科目名：韓国・朝鮮語表現論演習 b

◇副題：日本語と韓国・朝鮮語のアクセント・イントネーション

◇担当教員：宇都木昭

◇開講時限：水曜 3 限

◇教室：文総 522

◇目的・ねらい：

「音声研究」として総称される分野には、音声学と音韻論という二つの学問領域が含まれます。この授業では、音声学と音韻論の両方を射程に入れ、アクセントとイントネーションというトピックに絞って学んでいきます。一般言語学的な理論と分析の枠組みをふまえて、具体的には日本語と韓国・朝鮮語の現象を扱います。韓国・朝鮮語を専門としない受講生にとっても有益な授業となることを目指します。

この授業のねらいは以下のとおりです。

- ・アクセント・イントネーションをめぐる一般言語学的な理論を理解する。
- ・アクセント・イントネーションをめぐる音声学的・音韻論的な研究トピックを理解する。
- ・アクセント・イントネーションの音響音声学的な分析方法を習得する。
- ・日本語と韓国・朝鮮語のアクセント・イントネーションの仕組みを理解する。

◇履修条件等：

調音音声学と音韻論の基礎知識を有していること。基礎が不十分な場合は履修前に参考文献 1 (斎藤 2006) および参考文献 2 (窪蘭 1999) を読んでおくこと。韓国・朝鮮語の学習経験は問いません。

◇授業内容：

[概要]

この授業では、日本語と韓国・朝鮮語のアクセント・イントネーションを対象とし、理論、方法論、具体的事例を行き来しながら、このトピックに対する理解を深めていきます。

なお、この授業では音響分析の実習も行う予定です。PRAAT という音響分析ソフトウェアを用い、アクセントとイントネーションの分析の手法も学んでいきます。

[授業方法および計画]

授業は教員による講義、受講生による発表（文献レビュー）、およびコンピュータを用いた分析実習から構成されます。

この授業で予定しているトピックは以下のとおりです。

- ・音響音声学の基礎
- ・ピッチと基本周波数
- ・日本語（東京方言）のアクセント体系
- ・韓国・朝鮮語（ソウル方言、慶尚道方言、延辺方言）のアクセント体系
- ・日本語（東京方言）における句頭上昇、ダウンステップ、自然減衰、境界音調
- ・イントネーションの音声学と音韻論
- ・韓国・朝鮮語におけるイントネーションの諸現象

◇成績評価の方法：

発表（40%）および学期末レポート（60%）により評価します。

◇教科書：

プリント配布

◇参考文献：

1. 斎藤純男（2006）『日本語音声学入門』（改訂版）三省堂.
2. 窪菌晴夫（1999）『日本語の音声』岩波書店.
3. Johnson, K. (2011) *Acoustic and Auditory Phonetics* (3rd edition). Chichester: Wiley-Blackwell.
4. 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古 編（2012）『日本語アクセント入門』三省堂.
5. 杉藤美代子 編（1989）『講座日本語と日本語教育 第2巻 日本語の音声・音韻（上）』明治書院.
6. 川上稔（2005）『日本語アクセント論集』汲古書院.
7. 杉藤美代子 監修、国広哲弥・廣瀬 肇・河野守夫 編（1997）『日本語音声 [2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂.
8. Ladd, D.R. (2008) *Intonational Phonology* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
9. Gussenhoven, C. (2004) *The Phonology of Tone and Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.
10. Pierrehumbert, J. & M.E. Beckman (1988) *Japanese Tone Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.

11. Jun, S.-A. (1996) *The Phonetics and Phonology of Korean Prosody: Intonational Phonology and Prosodic Structure*. New York, NY: Garland.

12. 宇都木昭 (2013) 『朝鮮語ソウル方言の韻律構造とイントネーション』 勉誠出版.

◇注意事項：

ノートパソコンを所有している場合、授業に持参することを推奨します。

◆科目名：現代中国語表現論 b

◇副題：中国語学の諸問題

◇担当教員：丸尾誠

◇開講時限：月曜 3 限

◇教室：文総館 609

◇授業の目的とねらい：

現代中国語における個別の言語事象を理論化していくプロセスを体験することにより、中国語学の基礎を修得するとともに、論理的な思考および応用力を養成することを目的とする。

本講義では、中国語学に関する中国語で書かれた論文（必要に応じて日本語で書かれたものを扱うこともある）の講読を通して、現代中国語における文法研究の方法論を身につけていく。

◇履修条件等：

中国語（“普通話”）の運用能力を有すること。前期（現代中国語表現論 a）から引き続き履修することが望ましい。

◇授業内容：

〔概要〕

①ある言語事象について、研究テーマとなりうる問題の所在を明らかにするとともに、形式・意味・語用・認知などの側面から、総合的に分析を加えていく。

②講義時には、一般言語学的な視点をも交えて、現代中国語の文法事項について相対的に論じる。

③一般言語学における言語理論が、往々にしてその特異性ばかりが強調されがちである中国語という言語を分析する際にどこまで有用かという問題についても併せて考えていく。

④履修の前提として中国語学のみならず、言語学・日本語学・英語学などの知識をある程度有することが望ましい。従って、専門外の学生については、必要に応じて当該事項や概念・用語を調べてくることを別途課題として課すことがある。

〔授業方法および計画〕

後期も前期同様、論文講読が主となる。日本語に訳していく過程において、適宜用語や概念の解説を行う。講読する論文については、必ず予習をしていくこと。

◇成績評価の方法：

学期末レポート（80%）および出席・討論への積極的な参加などによる平常点（20%）。100点満点として、60点未満はD（不可）、60点以上70点未満はC（可）、70点以上80点未満はB（良）、80点以上はA（優）となる。レポートを提出しない場合には「欠席」扱いとする。レポートの課題は原則として授業で扱った複数のテーマの中から選択できる形式とし、その中に「自分の興味のある文法事象」について自由に論じるものも入れる予定である。その場合、問題の発掘という点が、とりわけ重要となる。

◇教科書：

プリントを配布する。学界の動向をも見据えつつ、定期的に刊行される学術雑誌の新しい論文・著書に細心の注意を払い、必要に応じてそれを教材として使用することもある。

(11) 参考文献：

取り扱うテーマに関連する個別の専門書・論文等については授業時に随時紹介するものの、中国語の文法を体系的に理解し、理論を構築していく際の前提となるものとして、以下に挙げるものに常日項目を通して、文法研究の方法論を把握しておくことが望ましい。

① 朱徳熙《語法講義》，商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）

② 朱徳熙《語法答問》，商務印書館（邦訳：『文法のはなし—朱徳熙教授の文法問答—』中川正之・木村英樹編訳，光生館） ※この②については邦訳本の方に訳者による詳しい注釈がついており、参考になるところが大きい。

③ 輿水優『中国語の語法の話 —中国語文法概論—』，光生館

◇注意事項：

特になし。

◇授業についての問い合わせ

メールでの質問などは常に受け付ける。オフィスアワーは、メールなどにより、個別に設定する。

担当教員の連絡先 maruo@lang.nagoya-u.ac.jp

◆科目名：ドラマ研究概論b／国際多元文化演習b

◇副題：ドラマ／パフォーマンス研究入門

◇担当教員：村主幸一

◇開講時限：金曜2限

◇教室：北棟107

◇目的・ねらい：

I ドラマの特性を捉える能力を訓練する

1) 研究書を輪読することによって、演劇テキスト読解に関する「基礎的な理解力」を養う。今学期は、Simon Shepherd and Mick Wallis, *Studying Plays*, 3rd ed. (London: Bloomsbury Academic, 2010), Ch. 4を中心に読み進める。この章は演劇におけるプロットとアクションを

扱っている（章の項目を以下に示す）。

2) 演劇作品を議論することによって「応用力」を養う。議論する作品はシェイクスピア作『リア王』と『マクベス』。

Chapter 4 Plot and action 77

<Plot, action and situation>

Action and events

Situations and their elaboration 79

The theatre of situations 80

<Modelling action> 81

Scales of action

From Aristotle to the well-made play

Shape of the action

Genre and structure

Boal and coercion

Tragedy and history

The arrangement of plots and action sequences

Plays within plays, metaheaturality and levels of fiction

<Story, plot and narration> 92

Story and plot

The telling of stories

Live and narrated action

Condensation, decorum, emotional effect and aesthetic thrill

Stageability, liaison, argument and pleasure

Character perspectives and choric functions

Silent narration

<Character and scenes> 99

What is a scene?

French scene analysis

Bits, beats and musicality

Agon and contradiction

II 研究方法、論文の書き方を体系的に修得する

みなさんがこれから修士論文や博士論文を執筆する過程で教員からそのときどきにアドバイスを受けることと思いますが、早い時期に「体系的に」理解しておき、執筆の過程で繰り返し振り返ることが大切です。論文執筆の技法はたんに知識としての理解だけではなくか身につかないと、学生諸君を見ていて感じます。論文執筆の技法は身体的訓練によるしかないとも言えましょうか。自分で実際に取り組む中で自己反省を繰り返すプロセスが大事です（この自己反省がたいへん甘いのです）。自己反省できる基礎を作ります。目指すのは論文作成の実践力です。

III 英語論文を読む力をつけるための訓練をする

この読みの力は研究にとっても役立ちます。英語ができるから英語論文が読んで理解できるかというとなかなか困難のようだと、これも学生諸君を見ていて思います。あなたはご自分

のリサーチを日本語文献の範囲に、また母語文献の範囲に限定しようとしていますか。英語文献をリサーチしないで、先行研究はないと豪語している学生も見かけます。とても残念だし、もったいないです。少し英語文献を覗いてみると、すぐに今まで知らなかった理論やアプローチが見つかることが多いからです。目指すのは研究ツールとして不可欠な英文読解の応用力と実践力を養成することです。

◇履修条件等：

とくになし。

◇授業内容（講義）：〔概要〕と〔授業方法および計画〕

（ア）について：1）後期では2つの演劇作品を取り上げディスカッションします。参加者にこれらの演劇作品について前もって「質問文」を作成していただき、集まった「質問文」を土台にして議論します。2）論文や研究書を輪読形式で議論の要点を捉えながら読み進めます。これは上記1）の作業をしないとき、すなわち回数としては最も多くなります。今学期は演劇論を扱った研究書（英語）をテキストとします。授業での課題は、当番を決め、その日に読み進んだテキストの要約（日本語）を作ってもらい、それを教員が加筆修正し、受講者全員にメール配布し、その日のテキストの内容理解を確認しながら進むという方法を取ります。3）ビデオ鑑賞。上記1）と2）以外のときに、1学期に1～2回、鑑賞体験をもとに作品について議論します。

（イ）について：教員が作成した冊子を用い、それに補足しながら、「研究」「論文」の概念を確立してもらうようにします。また、研究や論文執筆について学生が抱く疑問点についてクラスで考えます。

（ウ）について：そのねらいを、上記（ア）における2）の輪読作業を通して追求します。

◇成績評価の方法：

授業への参加（課題・提出物を含む）（50％）と学期末レポート（50％）。

◇教科書：

- ・2つの演劇作品（各自で購入か図書館蔵書利用）
- ・Simon Shepherd and Mick Wallis, *Studying Plays*, 3rd ed. (London: Bloomsbury Academic, 2010)（各自で複写）
- ・村主幸一『論文の手ほどき』など、教員の作成した教材資料。

◇参考書等：

- （以下の他には、Simon Shepherd and Mick Wallis, *Studying Plays* の Bibliography を参照）
- ・村主幸一『シェイクスピアと身体 危機的ローマの舞台化』（人文書院、2013）
 - ・オリヴァー・タプリン『ギリシア悲劇を上演する』岩谷智・太田耕人訳（リブレポート、1991）
 - ・マーティン・エスリン『ドラマを解剖する』山内登美雄訳（紀伊国屋書店、1978）
 - ・鈴木忠志・中村雄二郎『劇的言語』（白水社、1977）
 - ・鈴木忠志『演劇とは何か』（岩波新書、1988）
 - ・Phillip B. Zarrilli, Bruce McConachie, Gary Jay Williams, and Carol Fisher Sorgenfrei, *Theatre Histories: An Introduction*, ed. Gary Jay Williams (New York and London: Routledge, 2006)
 - ・*Dramatic Theory and Criticism*, ed. Bernard Frank Dukore and B. F. Dukore (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1997)
 - ・*Theories of the Theatre: A Historical and Critical Survey, from the Greeks to the Present* by Marvin Carlson, expanded edition (Cornell Univ. Press, 1993)
 - ・*Theatre/Theory/Theatre: The Major Critical Texts from Aristotle and Zeami to Soyinka and Havel*,

ed. Daniel Gerould (New York: Applause, 2003)

・ Mark Fortier, *Theory/Theatre: An Introduction*, 2nd edition (London and New York: Routledge, 2002)

・ *Critical Theory and Performance*, revised and enlarged edition, ed. Janelle G. Reinelt and Joseph R. Roach (Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, 2007)

・ *Performance: Critical Concepts in Literary and Cultural Studies*, ed. Philip Auslander (London and New York: Routledge, 2003), 4 vols.

・ *Modern Drama: Critical Concepts in Literary and Cultural Studies*, ed. Martin Puchner (London: Routledge, 2008), 4 vols,

◇注意事項：

・ 前後期の両方を受講することを強く勧めます。

◆科目名：ヨーロッパ都市文化論 b

◇担当教員：松岡光治

◇開講時限：火曜2 限

◇教室：文総館 623

◇目的・ねらい：

英国ヴィクトリア朝後期（1870-1901）の都市文化を研究する一次資料として小説を使い、研究に必要な調査力、読解力、分析力、想像力、発表力、修正力を強化する。具体的には、英語文献の精読と関連文献の渉猟によって、当時の時代精神と社会風潮の表層的な現象を理解するための基礎力、そして個別の都市文化の深層に隠れた真相を読み取るための実践力の養成を目的とする。同時に、小説の原書の輪読を通して英語読解力の基礎を固め、将来高校や大学レベルの英語教員になるために必要な文法と構文の実践的な運用能力の養成も目指す。さらに、人口に膾炙した問題でも、新たな解釈ができるような独自の視点の発見に努める。

◇履修条件等：

授業で扱うテキストは比較的難易度の高い英語の小説であるから、時間をかけて文法と前後関係を押さえる予習が必要となる。また、担当以外の箇所も真摯に予習する義務が課される。

◇授業内容（講義）：

ヴィクトリア朝の小説家（特にディケンズ、ギャスケル、コリンズ、ギッシング）の作品には、当時の人々が都市に対して抱いていたアンビヴァレンスをイメージ化した言説が充満している。ヴィクトリア朝の都市は、単なる背景を提供する場ではなく、綺羅星のように光かがやくと同時に、悪夢のように恐ろしい空間であった。都市の繁栄の裏面にあるスラム街、貧困、犯罪、売春、アヘン中毒などは、そうした都市空間の脆弱さを表象したものと言える。授業では、このように近代人の意識が捉えた都市のイメージをできるだけ多くの点から考察する。授業ではヴィクトリア朝後期の小説家ジョージ・ギッシングの短篇小説（“Too Dearly Bought”, “Fleet-Footed Hester”, “An Inspiration” その他）を輪読する。秀才で将来を嘱望されていたギッシングは、街の女を助けるために友人の金を盗んで退学となり、流離落魄の悲惨な実生活から材料を得て書いた自然主義的な作品が多い。作品を精読すると同時に、その背景としての時代精神と社会風潮を読み解く。

a. 初回の授業では、教員がギッシングの生涯、彼が活躍した当時のロンドン、ヴィクトリア

朝後期の帝国主義を概説し、短篇の冒頭部分の翻訳と注釈および鍵語の解説を行う。そのあと、次週からの担当者を割り振り、順番を決める。

b. 担当者は、担当箇所の英文を文法および前後関係の両面から精読し、日本語の翻訳を推敲し、語句注、鍵語解説、関連画像を入れたワード文書を作成し、担当時に教員と他の受講者に配布する。担当しない受講者も必ず毎週予習をし、質問とコメントを準備しておくこと。

c. 授業では、担当者がテキストの音読と翻訳をし、その他の解説を加え、随時、教員と他の受講者が質問とコメントを投げかけながら、作者の意図や当時の時代精神と社会風潮について議論する。同時に、教員がいかにして英文を達意の日本語に翻訳するか、その技術を指導していく。

d. 専用のメーリング・リスト (urban@lang.nagoya-u.ac.jp) が開設してあるので、授業時間以外でも、積極的に質疑応答を行う。

e. 最終回は、精読したテキストの内容を踏まえ、作品中に描かれた当時の様々な問題について議論し、それぞれの結論を導き出す。

e. 最終回は、精読したテキストの内容を踏まえ、後期ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮およびギッシングの自然主義的な思想について全員で議論し、それぞれ結論を導き出す。

f. 各自が担当した箇所の翻訳その他の配布資料については、授業での質疑応答を踏まえて加筆修正し、学期末レポートとして提出する。

◇成績評価の方法：

担当箇所の発表（50%）、質疑応答への参加（20%）、学期末のレポート（30%）。

◇教科書：

初回の授業で指定されたウェブ・サイトから電子テキストをダウンロードし、プリントアウトしたものを使う。

使用テキスト：George Gissing, “Too Dearly Bought”, “Fleet-Footed Hester”, “An Inspiration”

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/urban/gg-bought.doc>

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/urban/gg-hester.doc>

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/urban/gg-inspiration.doc>

◇参考書：

松岡光治（編）『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化』（溪水社、2007年）

Pierre Coustillas, *The Heroic Life of George Gissing*, 3 vols. (Pickering, 2011-12)

ギッシングに関する情報は担当教員のウェブ・サイトを参照のこと。

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/Gissing.html>

◇注意事項：

正当な理由があれば授業の欠席を許可するが、担当箇所は事前にメーリング・リストに流すこと。

◆科目名:ヨーロッパ文化分析批評論 b

◇副題:文化研究の方法論—絵画を読み解く、文字テキストを読み解く

◇担当教員:上原早苗

◇開講時限:木曜 5 限

◇教室:北棟 107

◇目的・ねらい: 授業で学んだ批評の枠組みを実際に使用しながら、絵画や文字テキストを分析することで、方法論を用いる応用力を養う。

◇履修条件等: 授業の最初に、前期授業で学んだ文化研究の方法論を簡単に復習し、学習内容を確認するが、前期開講の「ヨーロッパ文化分析批評論 a」を履修していることが望ましい。

◇授業内容(講義):

この授業は、19世紀イギリスにおいて物議を醸した絵画や文学テキストを取り上げ、なぜセンセーションを巻き起こしたのか、その理由に迫ろうとするものである。特に注目したいのは、こうした絵画や文学テキストには、解釈しようとしても解釈されることを拒み、それが物議を醸した理由と密接不可分に関わっているという点である。この授業で扱うのは主として、イギリスの画家(ロセッティ、ハント、A.L. エッグ等) および作家(ハーディ)の作品だが、予備知識は特に必要ではない。

授業の具体的な展開は以下のとおりである。

- 1 導入 文化研究の方法論の復習
- 2 意味に解消されることを拒む絵画とは
- 3 絵画を読む(1) ロセッティ「受胎告知」
- 4 絵画を読む(2) ハント「良心の目覚め」、A.L. エッグ「過去と現在」
- 5 意味に解消されることを拒む文字テキストとは
- 6 文学テキストを読む(1)ハーディ『テス』
- 7 文学テキストを読む(2)ハーディ『ジュード』
- 8 解釈再考 絵画・文字テキストを解釈することは可能か

なお、授業の進め方としては、講義を行うだけではなく、受講者のレポートの作成や発表、討論等を通じて、より大きな成果をあげてゆきたい。この授業の受講者として念頭にあるのは、文化研究の方法論を学びたいと思っている学生、あるいは自身の研究を理論的に先鋭なものにしたいと考えている学生だが、知的好奇心のある「勤勉な」学生であれば、誰でも受講することを歓迎する。

◇成績評価の方法: 授業への貢献度(50%、注意事項2を参照のこと)、レポート(50%)

◇教科書: 初回の授業で指定されたウェブ・サイトから画像・電子テキストをダウンロードし、プリントアウトしたものを使う。

〈画像〉 ロセッティ「受胎告知」、ハント「良心の目覚め」、A.L. エッグ「過去と現在」

〈文字テキスト〉

Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (London: Macmillan, 1912), Phases 1 & 2.

トマス・ハーディ『ダーバヴィル家のテス』(邦訳は色々あるが、井出弘之訳が名訳。) Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (London: Macmillan, 1912), Part 1.

◇参考書:

池田潔 『自由と規律』(岩波新書)

◇ 注意事項: 1 本授業は、英語高度専門職業人コースの「国際多元文化特殊講義 II b」との合併授業である。2 グループあるいはペアによる討論の時間が多いため、積極的に意見を述べることを期待される。3 受講を検討しているが初回の授業に出席できない場合は、予め 担当教員に相談すること。4 オフィスアワー: 随時。ただしメールにて面談の予約をとること。5 平成 26 年度「社会人特別選抜」枠での入学者: 集中講義の希望があれば、同一授業を夏期休暇中に開講する。

◆科目名: ヨーロッパ文化芸術論 b

◇副題: 文学テクストを読み、分析するとはどういうことなのか。

◇担当教員: 西川智之

◇開講時限: 水曜 2 限

◇教室: 文総館609

◇目的・ねらい:

前期の授業に引き続き、「語り」に焦点を合わせ、何人かの研究者の理論を学び、文学研究の基礎的方法の一つを身につけるとともに、学んだ理論に基いていくつかの文学作品を実際に分析することで、文学研究の応用力を培います。

◇履修条件等:

前期授業ヨーロッパ文化芸術論 a から引き続き履修することが望ましい。

◇授業内容(講義):

〔概要〕

文学テクストは、「作者」がどのような物語を「読者」に向けてどのように「語っているか」ということが、その根底の構造にあります。従って、文学作品を考察する時には、そこに何が書かれているかということと同時に、それがどのように「語られているか」ということを考えることが重要になります。この講義では、文学作品の「語りの構造」を扱った研究をいくつか紹介し、受講者が将来、文学作品をテーマに修士論文や博士論文を執筆する際の、研究者としての基礎的力・応用力を身につけてもらいます。

後期の授業では、「読書行為」や「読者」に重点を移し、文学作品の複雑な構造を読み解くさらなる方法を探ります。

授業は少人数が予想されることから、授業中における受講者の積極的な発言がもたせられることとなります。授業では、次回の授業で扱う文献を指示しますので、その文献についてレジュメを作ってきてもらい、それに基づいて次回の授業が進められます。

〔授業方法および計画〕

基本的には、与えられたテクストを丹念に読み進めることが授業の中心となります。

後期の授業で取り上げる予定の文献は、以下の通りです。

ウンベルト・エーコ 『開かれた作品』(青土社)

ウンベルト・エーコ 『物語における読者』(青土社)

ジョナサン・カラー 『デイコンストラクション1・2』(岩波現代文庫)

ヴォルフガング・イーザー 『行為としての読書』(岩波モダンクラシックス)

フランツ・シュタンツェル 『物語の構造』(岩波書店)

スタンリー・フィッシュ 『このクラスにテクストはありますか』(みすず書房)

◇成績評価の方法：

担当箇所の発表（50%）、授業への参加（30%）、前期のレポート（20%）

◇教科書・参考書等：

授業時に配布

◇注意事項：

オフィスアワーは、特に設けません。随時、面談前にメールで連絡を取ってください。

◆科目名：国際社会学演習 b

◇副題：グローバリゼーションと宗教／スピリチュアリティ

◇担当教員：鶴巻泉子

◇開講時限：木曜 5 限

◇教室：文総館623

◇目的・ねらい：

グローバル化に関する宗教学・宗教社会学における基本的概念を理解し、基礎的知識を身につけると共に、アプローチ毎の問題設定や射程の違いを確認する。グローバル化と宗教に関する一般的・ステレオタイプの言説から距離を取り、現代の宗教的現象とそれに関する言説を批判的に検討する実践力を養う。

◇履修条件等：

前期「演習 a」・後期「演習 b」を通じた受講が望ましいが半期の受講も可能。授業は講義・演習をミックスした形式となる。この授業は宗教を神学的あるいは哲学・思想的関心から捉えようとするのではなく、社会学的関心から一つまり、特定の時代を背景とした社会経済構造との関連において-宗教・宗教に関する事象を捉えようとするものである。そして特にグローバリゼーションと多文化社会の文脈の中で、現代に特有な宗教・スピリチュアリティ現象を考えようとする。国際社会学や宗教社会学等を専門とした人のみを対象とするのではなく、一般にエスニシティ、多文化主義、ジェンダー、ナショナリズム、トランスナショナリズム、社会的排除など様々な分野に関心を持つ方の受講を歓迎する。ただし講読文献は必ず読んだ上で出席し、かつ議論に積極的に参加することが受講条件となる。

◇授業内容：

〔概要〕と〔授業方法および計画〕

宗教は特定の国や地域を越えて普及・受容されるものであると同時に、特定の土地の文化と接触の中で現地化（ローカライゼーション）されると共に、国民国家に対しても多様な関係を築いてきた。しかし近年、グローバル化と宗教に関して新たな注目が生まれている。グローバル化と同時に暗黙の内に想定された世俗化と、同時に逆行するかのような再聖化の動きがあること；宗教の「個人化」が進展すると同時に、ネットなどを通じた新たなコミュニティが形成されていることが挙げられる。また宗教と領域の結びつきが「自明」とされた時代とは異なり、多くの国々で宗教的マイノリティーが生まれ、特定の宗教信者に関するレイシズムの進展が問題になっている。

この授業では、理論的諸問題（宗教／公共空間／「グローバル化」；宗教の個人化とスピリチュアリティ：世俗化と再聖化）と共に一定の地域をフィールドとした実証研究（ex.特にヨーロッパとイスラム）を取り上げる。授業数回は講義形式で進め、残りの回は理論・事例を扱った研究の文献講読（参加者の希望と専門に応じて講読文献を選択）を行う予定。

◇成績評価の方法：

議論への積極的な参加 (50%) と講読文献の担当発表 (50%)

◇教科書・参考書等：

文献リストを配布。

◇注意事項：

欠席の際には前もってメール ([tsurumaki \(アット\) nagoya-u.jp](mailto:tsurumaki@nagoya-u.jp)) での連絡を御願いたします (: (アット) の部分を@に変えてください)。オフィスアワーは特に設けませんが、電話やメールなどでアポを取ってください。

◆Title 現代文化研究特論

◇Subtitle Studies in Postmodernity and Beyond (Fall)

◇Instructor Mark Weeks

◇Day / period Wednesday, 4th

◇Classroom 文総館 522

◇Aims

1. While deepening students' modern cultural knowledge, the course aims to develop the ability to critically engage with influential, challenging texts across a variety of academic and artistic fields, then to draw creative, coherent connections between them.

2. Students will become practiced in constructive, critical exchange of ideas as well as in marshaling research support into a clear, effective argument.

3. Ultimately, the aim is to help foster motivation and skills to think deeply, actively and flexibly across fields so as to make practical future contributions to important cultural dialogues and decision-making.

◇Course description

The uncertainty attending cultural acceleration and economically driven globalization generates numerous forms of response, from protest to resignation, from immersion to escape. This cross-disciplinary course explores the complex interaction of forces determining the way societies and individuals function in this ever-changing environment through the work of some of the most influential, innovative thinkers and artists of recent decades. A central focus is a movement away from traditional concepts of a unitary society or self towards dynamic models of “playful” interaction, multiplicity and self-creation. Yet without a stable sense of identity formed through lasting social, cultural attachments are citizens left helpless? If so, what strategies of resistance are available? The following is a tentative list of themes, most based on short readings.

1. Introduction: Course orientation

A. DESIRE, PLEASURE AND POWER

2. One Flew Over the Cuckoo's Nest (literature, film)

3. Pleasure, power: Foucault (cultural history, philosophy)

4. Zen, play and laughter: The Laughing Buddha (cultural history)

5. Andy Warhol: art as subversive play (literature, visual art)

B. FREE PLAY IN POSTMODERN THOUGHT

6. “Toward a concept of postmodernism”: Hassan (cultural theory)
7. Pleasure of the Text, “Death of the Author”: Barthes (literary theory)
8. The play of desire and difference: deconstruction (philosophy)
9. Consumerism and hyper-reality: Baudrillard (cultural philosophy)
10. Literature of postmodernity (literature)

C. POSTMODERN SELVES AND BEYOND

11. Play of identities: Anderson, Sherman (literature, arts)
12. “Asobi in Action”: play in modern Japan (cultural history)
13. Otaku and play in contemporary Japan (cultural theory)
14. American Beauty: work, play, desire (film)
15. “Western Buddhism” and Capitalism: Zizek (cultural philosophy)

◇Evaluation criteria

Students will be evaluated according to a mid-semester report (30%), final report (40%) and participation (30%).

◇Textbooks

All texts are provided by the instructor electronically. Articles or short extracts from texts are assigned for homework most weeks.

◇Other materials

Extra, optional reading materials related to the course content will be distributed to students electronically.

◇Reference materials

A dictionary for using English.

◇Notes

This course covers a variety of scholarly and artistic fields, but familiarity with the fields, texts and ideas on the course is not a prerequisite. All that is required is a willingness to open one’s mind to a variety of ways of thinking, viewing cultures and expressing ideas.

Classes are conducted primarily through informal, cooperative class and group discussions.

◆科目名：ジェンダーと経済 b

◇副題：実証編

◇担当教員：新井美佐子

◇開講時限：木曜 4 限

◇教室：北棟 105

◇目的・ねらい：

- ・経済学あるいは経済事象にジェンダー視点から接近し、そこにおける問題点を理解する。

・文献の講読、レジュメ作成、ディスカッションへの参加を通じ、論文を書く、意見を交わすといった研究活動の基礎を修得する。

◇履修条件等：

特になし。前期開講の「ジェンダーと経済 a」から継続受講することで上記「目的・ねらい」がより達成されると思われる。また、下記「注意事項」も参照のこと。

◇授業内容（演習）：

経済学では、いわゆる主流派、非主流派の双方において、長らくジェンダー視点が欠落していた。このことを見直し、経済学やジェンダー研究の学問的発展につなげようとする動きが活発化したのは、1990年代に入ってからに過ぎない。本演習では、女性研究者を中心に、学派の相違を越えて取り組まれているこうした試み - 「フェミニスト経済学」 - について、国内外の文献から学ぶ。

具体的には、前期開講の「同演習 a」における理論的研究文献の講読を受け、実証的研究文献を取り上げる。実証分析の対象 - 地域（国）、時期、等。つまり講読文献 - は、受講者の希望を考慮して決定する。

毎回の流れは以下の通り。

1. 報告者による講読文献のまとめ（要レジュメ）
2. 用語・内容等に関する質疑応答や解説
3. 報告者あるいは受講者が提示したディスカッション・ポイントについて議論

レジュメには、単に講読文献からの抜書きを羅列するのではなく、講読文献の構成や内容が明瞭に捉えられるよう工夫を凝らして欲しい。またディスカッション・ポイントの提示に際しては、講読文献の内容を補足あるいは発展させるようなデータや文献、資料を添付するなどしても構わない（むしろ望ましい）。これらの作業は、テーマに関わらず、「論文を書く」 - 既存研究の不足点あるいは批判すべき点を見出し、問題として設定し、適切な方法と過不足なく明確な論述によって解を示す - ための訓練の一つとなろう。

なお上記に加えて、ジェンダーに関連する国内外の時事の紹介やそれについての簡単な意見交換をしたり、教員あるいは受講者が参加した関連学会・研究会に関して適宜報告し、最新の研究成果の把握に努める。

「経済」という語がカバーする範囲はいうまでもなく非常に広く、特にジェンダーとの関わりが深いと考えられる分野に限っても、労働、子育て・介護をはじめとする社会的再生産、社会保障、あるいはグローバルな経済システム等、多様である。本演習でこれら全てについて検討することは無論不可能であるが、上記のような様々な経済領域が密接に関わりあっているということを常に念頭に置き、広い視野でジェンダーを捉えるよう心掛けて頂きたい。本演習を通じて、ジェンダー研究が、女性（とりわけ、いわゆる「働く女性」）のみの利益を追求・主張するものでは決してないことが理解されると思う。

◇成績評価の方法：

毎回のディスカッションへの参加度（50%）、ならびに報告担当時のレジュメ/ディスカッ

ョン・ポイントの内容 (50%)。

◇教科書・参考書等：

上記「演習内容」を参照のこと。参考書については、演習中に適宜指示する。

◇注意事項：

経済学の知識を備えた上での受講が望ましいことは無論だが、必須ではない。「経済」とは、われわれの「日常生活」とも言い換え得る身近な活動であり、そこにおけるジェンダー問題とは誰しも無関係ではないはずである。受講者の希望（言語、難易度など）を可能な限り考慮して講読文献を決める予定なので、専門分野を問わず、また単位が不要であっても、関心や意欲のある学生の真摯な受講は大いに歓迎する。なお、欠席する際には、メール等にて極力事前連絡のこと。

◇オフィスアワー：

授業期間中の木曜 12～13 時。メール (arai at nagoya-u.jp) での質問、問い合わせ等は随時受け付ける。

◆演習名：ジェンダーと文学 b

◇副題：中国近現代の女性文学・文化

◇担当教員：星野幸代

◇開講時限：水曜 2 限

◇教室：北館 105

◇目的とねらい：

中国近現代及び台湾の女性／ジェンダーをめぐる言説を理解することを目的とする。

一、 基礎編：近現代中国のジェンダーをめぐる社会的状況を理解するため、中国近現代文学を、単に中文を和文にするのではなく歴史的背景を踏まえて精読する。

二、 応用編：精読した文学に関連する論文（高水準の学術雑誌に掲載のもの）を読み、論文の作法を学ぶとともに疑問点を討論することにより、学術論文を書く力を磨く。

◇履修条件等：

文学的な中国語を和訳する技能があることが望ましい。

◇授業内容：

第一回 ガイダンス①授業全体についてアナウンス②テキストについて概説

第二～三回 台湾映画『GF * BF [女朋友, 男朋友]』(2012) を、鑑賞のポイントが多様な家族の形。当日鑑賞のためのレジュメを配布します。そこに示されたディスカッション・ポイントに従って各自メールでミニ・レポートを提出して下さい。第三回はそれをもとに討論します。

第四～十四回 (10) に提示した①のテキスト：2 頁位ずつ割り振り担当者を定める。担当者は中文和訳とともに固有名詞、時代背景を表す言葉についての解説、疑問点を添えてレ

ジュメとして配布する。＊共訳は検討を加えた上で翌年言語文化論集に投稿する予定。

第十五回 ①のテキストを論じた論文②を読む。担当者は要点をレジュメにまとめ、論旨への疑問／自分の把握したディスカッション・ポイントを提示して発表する。その後、参加者は担当者の挙げた疑問、ポイントについて討論する。

◇成績評価の方法：

担当者を一回以上こなすことを必修条件（60％）とし、授業中の積極的な発言や討論への参加度を（40％）として、総合的に評価する。

◇教科書

①張愛玲「第一炉香」『張愛玲典藏全集 5』皇冠叢書 200

②濱田麻矢「女學生だったわたし：張愛玲『同學少年都不賤』における回想の敘事」『日本中国学会報』2012

◇参考書等：

ジョセフィン・ホー『「性別」攪乱—台湾における性政治』御茶ノ水書房 2013。その他必要に応じて提示する。

◇注意事項：基本的な用語を理解しておくために、「ジェンダーと文学 a」を受講しておくことが望ましい。

◇オフィスアワー：

（水）3限 メールでの質問は常に受け付けます。

hoshino@lang.nagoya-u.ac.jp

◆科目名：ジェンダーとセクシュアリティ b

◇副題: Introduction to bisexual studies

◇担当教員: Chikako Matsushita

◇開講時限:火曜 2限

◇教室:北棟 107

◇目的・ねらい:

Understand theoretical concepts and terminology in the field of sexuality studies.

Develop a strong scholarly argument.

◇履修条件等:

◇授業内容(演習):

This course aims to offer critical insights into human sexuality expressed, viewed and constructed in various texts. Providing students with a critical overview of theory and research on gender and sexuality, especially from the first volume of Michel Foucault's History of Sexuality, it will introduce how to analyze "critically" and "academically" the desires and the pleasures that faculty might obtain from various sexual images. Bisexuality will be the special feature of this semester.

◇成績評価の方法:

Students will be evaluated according to their participation (30%), mid-semester report (30%) and a final report (40%).

◇教科書・参考書等:

Marjorie Garber, *Vice Versa*.

◇注意事項:

英語コース G30 との合併授業です。

オフィスアワー:火木・正午~午後1時(メールなどで事前に予約すること)

◆科目名：ジェンダーとメディアⅡ

◇副題：オンラインコミュニケーション論

◇担当教員：金 相美

◇開講時限：木曜3限

◇教室：北棟107

◇目的とねらい (Objectives) :

ソーシャル・メディアの社会文化的影響:受講生はニューメディア分野の新たなエリアともいえる「ソーシャル・メディア」について、様々な分野からのより深いアプローチによる探求に取り組むこととなります。特に、Facebook やツイッターなど「ソーシャル・メディア」の社会・文化・政治的含意、社会心理(人間関係論)および政治的課程に及ぼす影響について学ぶことを目指します。

The Purpose of the class is to offer the student an opportunity to delve into a new area of “Social Media” study or to pursue various kinds of the subject area in more depth. The course includes exploring the social, cultural and political implications, social psychology (Human Relations or Human Communications), and the effect toward political process of the social media such as Facebook or Twitter.

◇履修要件・関連する授業 (Prerequisites) :

当該授業内容である SNS, BBS, YouTube などネットを通じたコミュニケーション・ツールおよびそれらの社会・文化的相互作用に強い興味を持つこと。関連文献の解説・理解のための英語力は必須であり、授業でのディスカッションに参加しこの授業をフル活用するためには少なくとも上級レベルの英語学習者であることが望ましい。授業ではディスカッションに積極的に参加することが求められる。

Interests towards Communication through the Internet such as Blog, SNS, BBS, YouTube etc and its' social and cultural interaction are preferred. English proficiency would be necessary in order to read and understand the related books and materials. If you want to fully participate and benefit from this class, you need to be at least an advanced learner of English. Students will be encouraged to participate

actively in the discussion.

◇授業内容 (Course Description) :

- ・ スマートフォンのような ICT の発展の社会・文化的含意
- ・ オンラインコミュニケーション、特に、SNS によるニュース生産・配布・消費
- ・ ソーシャル・メディアが人間関係、政治過程に及ぼす影響
- ・ ソーシャル・メディアとジェンダ・ギャップ、知識ギャップ、格差問題

に関して先行研究を元に概説し、ディスカッションを行う

This course explores the social and cultural implications of developments in ICT and related digital media such as smart phones, particularly in terms of how these have dramatically altered the processes of news production, distribution, and consumption and the formation of public opinion. From the theoretical perspective of online communication, we will investigate the influence that interactive web-based communication tools such as social networking services (SNS) are having on the political process and consider the potential role of digital media in promoting social trust and greater participation in elections. In addition, we will discuss about the issue of negative social effect of the social media, for example, digital divide, knowledge gap, and gender gap.

◇成績評価方法・基準 (Evaluation criteria) :

発表・出席・宿題(40%)、授業への貢献度(30%)、オンライン参加度(30%)

40% Presentation, Assignments, attendance

Your participation grade is based on your demonstrated engagement with the course materials, your classmates and me.

30% In-Class Participation

You are expected to complete the assigned readings before class and come prepared to discuss them. Be ready to answer questions, volunteer opinions, and find textual evidence to support your point.

30% Online Participation

We will be using the course blog to discuss both the course readings and contemporary debates over technology and culture. You are responsible for answering at least one of the discussion questions posted each week.

◇教科書・参考文献 (Textbooks/Reference texts) :

Sang-Mi Kim, & Kobayashi, T. (2010). *“Revisiting the hypothesis of Political Knowledge Gap in Asia's*

context.”, Networking Democracy? New Media Innovations in Participatory Politics Symposium, June

25-27, Babeş-Bolyai University, Cluj, Romania.

Affective Publics: Sentiment, Technology, and Politics, 2014 Zizi Papacharissi, Oxford Univ Press

It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens, 2015 Danah Boyd, Yale University Press

Republic.com, 2001 Cass R. Sunstein, Princeton Univ Press

Various kinds of global Academic Research Papers

JOURNALISM & MASS COMMUNICATION QUARTERLY

PUBLIC OPINION QUARTERLY

COMMUNICATION RESEARCH

HUMAN COMMUNICATION RESEARCH

INTERNATIONAL JOURNAL OF PUBLIC OPINION RESEARCH

A list of reference texts will be provided on the class website or in the classroom.

◇注意事項：

なし

◇連絡先（Office Hour）：

メールでの質問などは常に受けつけます。オフィスアワーは、水曜日 4 限です。

連絡先：

kimsm@nagoya-u.jp

教養教育棟 2 階 206 号室

◆科目名：ジェンダー論概論b

◇副題：ジェンダー研究の基礎から応用へ

◇担当教員：新井美佐子

◇開講時限：金曜 3 限

◇教室：北棟 105

◇目的とねらい：

ジェンダー研究に必要な基礎的概念と学際的研究手法を習得し、受講者のジェンダー研究への応用を目指す。

◇履修条件等：

前期開講の「ジェンダー論概論a」を履修済みであること。

◇授業内容（演習）：

ジェンダー論の関連文献を受講者で輪読し、広くジェンダー研究に必要な基礎的概念や学際的研究手法を習得する。また意見交換の重要性を理解する。

1. 文献講読 Part 3（「ジェンダー論概論a」から継続）

2. 文献講読 Part 4

3. まとめ

◇教科書・参考書等：

初回に指示する。

◇注意事項：

ジェンダー論講座教員によるオムニバス形式で行う。

◇オフィスアワー：
メールなどで随時予約。

◆科目名:ジェンダー論演習b

◇副題:ジェンダー研究実践

◇担当教員:星野幸代

◇開講時限: 金曜 4 限

◇教室:北棟 105

◇目的・ねらい：

ジェンダー研究の実践、プレゼンテーションの方法、研究論文の書き方等を習得する。

◇履修条件等：

ジェンダー論概論aを履修済みであること。（担当教員が特別に受講を認めた場合はこの条件を免除する。）

◇授業内容(演習)：

この授業では受講生が各自の研究テーマに基づきリサーチを行ったうえで成果を発表する。授業はジェンダー論講座教員によるオムニバス形式で行う。具体的な内容は以下の通り。

- 1、イントロダクション: 授業の概要を紹介
- 2、プレゼンテーションの方法
- 3、研究論文の書き方
- 4、プレゼンテーションの実践
- 5、研究論文の執筆実践及びフィードバック
- 6、まとめ

◇教科書・参考書等：

プリントを配布

◇注意事項：

特になし。

◇オフィスアワー：

メールなどで予約